

歴博資料からの「発見」を授業へ —南蛮貿易と海域アジアの授業を例に—

関西大学高等部 宮崎 亮太

1. 実施学年および教科・領域

高等学校第2学年 日本史 B 選択者 地理歴史科・日本史 B

2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

- (1) 主題名 歴博資料を使って南蛮貿易と世界の動きを考えてみよう
- (2) ねらい

高等学校学習指導要領の地理歴史科（日本史 B）では「我が国の歴史の展開を諸資料に基づき地理的条件や世界の歴史と関連付けて総合的に考察させる」ことを目標として掲げている。また、近世の日本と世界についても国際環境と関連付けて考察することが求められている。16世紀はヨーロッパ諸国やアジア各地が相互に交流を深化させる時期であり、世界の一体化が進展することを、資料を活用して考察させ、結果を自らの言葉で表現させることとした。

日本学術会議の提言^(注1)では、日本史 B は「一国史」的に教える傾向や教科書の内容が多岐にわたることから教科書を用いて通史をおさえる知識詰め込み型の授業が多いとの指摘がある。実際、少子化で学校間競争が激しくなるなかで、大学受験を意識した進度管理の下で授業を進めていかざるを得ない面がある。ゆえに、日本史を「一国史」的ではなく、世界史と関連させながら授業を展開していくことにも限界がある。一方で、グローバル社会に対応する思考力の育成や言語活動の充実が求められ、探求型授業を取り入れる学校もある。本校もその一つである。しかし、知識理解を中心とした受動的な学習のなかでは、生徒が課題を設定して問題解決を図る探求型学習を進めていくことが難しい現状もある。

そこで、生徒が資料を活用し、発見して考えたことを主体とした授業展開ができないかと考え、南蛮貿易の単元で試みた。南蛮貿易の単元は、中学校の教科書では大航海時代前後のヨーロッパの状況を含めて比較的詳しく取り扱うため、基盤となる知識を習得しているはずである。そうした知識を日本史や世界史という既存の枠組みを越えて結合させ、知的好奇心や国際性の涵養を目的とするものである。

(3) 博物館との関連

本校は立地から歴博を見学するという方法を採用することが難しいため、歴博資料を授業で活用した。博学連携は博物館を学校行事や授業に関連させて見学することが多いが、博物館利用以外に博物館資料を貸し出して現場で活用する方法により博学連携を模索する動きが各地の博物館で起こっている。しかし、どのような資料をどの場面で活かすかは教員の力量に拠るところが大きい。そこで、幅広く現場で活用できるようにするには、博物館の研究機能を活かして、資料とそれに付随する研究成果を通常授

業に反映させることができるような博物館資料の活用の標準化をはかることも必要と考える。博学連携の活性化により、博物館と高等学校の親和性を高め、生徒はもちろん教員の博物館への関心を高められるのではないだろうか。

以上のことを踏まえ、本実践では「南蛮人来朝図屏風」を活用して日本から見たヨーロッパ、「ティセラ日本図」を活用してヨーロッパから見た日本をそれぞれ考えさせることとした。また、2008年度特集展示と2013年度企画展示で取り上げられた南蛮漆器を16世紀の日本を取り巻く国際環境を考える材料として紹介した。他にも第2展示室の「大航海時代のなかの日本」の展示において「ポルトガル語起源の外来語」や「東アジア関係図」のパネルを参考にした。

歴博のパネルは細かい部分まで非常に参考になり、そのまま授業に活かせるものが多くある。これも歴博の研究の成果であり、写真撮影も許可されているので教員が歴博を見学して記録し、授業に活用することができる。

3. 指導計画 [3時間で構成する]

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	10分	○本時の目標や取り組みの方法について説明 ○屏風についての説明 ●屏風とは何かを理解する。	□開始前に班ごとに着席するよう指示し、「南蛮人来朝図屏風」(複写)を班ごとに配布。また、ワークシート<資料参照>を全員に配布。
展開	5分 20分	○「南蛮人来朝図屏風」を見て、まず何に注目したかを発問。 ○何に注目したかをワークシートに記入させる。 ●「南蛮人来朝図屏風」を俯瞰し、全体の構成を理解する。 ○「南蛮人来朝図屏風」を南蛮船周辺や南蛮人行列などいくつか区切り、班ごとにそれぞれ違う部分を観察させ、ワークシートに記入させる。 ●「南蛮人来朝図屏風」の細部を観察し、色遣いや描かれている人物のしぐさ、表情、服装、船、町並みなど、資料を読み解く材料を集める。	□「南蛮人来朝図屏風」全体を俯瞰させることで、資料へ関心を持たせる。 □「南蛮人来朝図屏風」の細部を観察するとき、「きれい」「派手」などの抽象的な漠然とした意見から出ると考えられるので、どのような点に着目するか(色遣い、屏風全体からみた位置関係、人物の表情やしぐさなど)ということはある程度予め示しておく。 ■グループワークへ積極的に参加し、活発な議論を行っている。また、ワークシートに小まめに記録している。<関・技> ■グループワークにおいて、資料を観察して気付いた点の中から、課題を発見できる。<思>

	<p>5 分</p> <p>10 分</p>	<p>の際、「ティセラ日本図」の概要について説明を加える。</p> <p>○班ごとに「ティセラ日本図」を観察し、気付いた点を班で話し合い、ワークシートにそれぞれ記入させる。</p> <p>●「ティセラ日本図」がどのような資料であるかを理解する。</p> <p>○班ごとに気付いた点を発表し、ヨーロッパから見た日本について考えさせる。</p> <p>●石見銀山が大きく描かれていることや、描かれている都市がキリスト教布教や南蛮貿易の拠点であることを理解する。</p> <p>○南蛮貿易で日本からの主な輸出品について、どのようなものがあるか資料集を参考にして確認させる。</p> <p>●南蛮貿易における日本からの主な輸出品を理解する。</p> <p>○南蛮貿易で日本からの主な輸出品のうち、南蛮漆器について取り上げる。南蛮漆器の図版を見て、用途や形の特徴、材料など気付いて点を考えさせてワークシートに記入させる。</p> <p>○ワークシートに記入したことを発表させる。</p> <p>●各地の影響を受けて日本でつくられた南蛮漆器が輸出されていたことを理解する。</p>	<p>■グループワークに積極的に参加し、また、気付いた点を小まめにワークシートに記入している。</p> <p>□歴博の平成 25 年度企画展示「時代を作った技—中世の生産革命—」から南蛮漆器の図版を複写し班ごとに配布。</p> <p>□全員ではなく、複数の生徒に発表させる。</p>
<p>まとめ</p>	<p>5 分</p>	<p>○アジア海域のネットワークについて説明を加える。</p> <p>●南蛮貿易はヨーロッパと日本の間で行われたのではなく、アジア海域のネットワークのな</p>	<p>□次回の内容に備え、教科書と資料集を予め見ておくように指示する。</p> <p>□ワークシートを回収し、生徒の取り組み状況を後ほど確認する。</p>

		<p>かで主に行われた貿易であることを理解させる。</p> <p>○次回の予告</p>	
--	--	---	--

過程	時間	○学習活動 ●学習内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	5分	○前時の振り返りと本時の説明	□ワークシートを返却し、本時に使用するプリントを配布する。
展開	30分	<p>○大航海時代にいたる3つの海域世界成立と南蛮貿易について教科書と資料集、プリントを使って説明し知識整理を行う。</p> <p>●イタリア商人、ムスリム商人、中国商人がそれぞれ海域ネットワークをつくり上げ、大航海時代がそれらを結び付けて成立していることを理解する。特に、アジア海域ではどのような地域が結合していたかを地図で確認する。</p> <p>○1時限目と2時限目の取り組みを通して、自分で考えたことや他の生徒の意見と本時の説明や教科書、資料集を通して得た知識がどの程度関連しているか。また、関連付けられない意見で気になったことをピックアップしてワークシートにそれぞれ記入させる。</p>	<p>□世界史と日本史の融合授業とするため、事前に世界史の進捗を確認しておき、世界史の教科書と資料集をもとに日本史にどのように組み込めるか計画しておく。</p> <p>□資料の読み解きと関連させる展開とするように留意する。</p> <p>■指示のもとにプリント作業ができています。〈関〉</p> <p>■これまでの取り組みを通して発見してきたことが、教科書を通じた知識理解のなかに位置づけることができる。〈知〉</p> <p>■資料の読み解きを通して新たな問いを立てることができる。〈思・技〉</p>
まとめ	5分	○全体の振り返り	<p>□複数の生徒に全体の感想を聞く</p> <p>□ワークシートの回収</p>

4. 実践の概要

12月の定期考査後の授業において日本史選択者2クラス(15名と8名)を対象に実施した。南蛮貿易の単元を選んで資料の読み解きを行ったが、理由としてこの単元は中学校の授業を通して比較的知識が定着し、関心を持っている生徒が多いと考えたからである。また、ある程度生徒にイメージが形成されている方が、資料の読み解きを通して今までの既成概念を崩すことや資料を介した知識の結合を感じられるのではないかと考えたということもある。

< 1 時間目 >

生徒にとって屏風とは美術館や博物館にあるものとして捉えられ、屏風がある生活空間は想像しにくいものになっている。そのため、まず屏風の歴史や機能、用語など概略を説明した。

次に、「南蛮人来朝図屏風」の資料をグループ（3人ずつ）ごとに配布し、まず何が描かれているか全体を概観して気になった点を挙げさせた。生徒は「何か気が付いた点や感じたこと」という問いかけに対して、「どのような答えを教員が求めているのか」と逆にこちらに質問をした。このように、日本史 B でこのような授業を行うのが初めてであるということもあるが、読み解きについて初めは困惑する様子も見られた。読み解きに際して教員の手引きをどの程度まで行うかは難しいところである。

その後、屏風をいくつか区切って細かく観察させ、グループ内で出た意見をそれぞれ発表させ屏風からの情報を共有した。生徒から挙げた意見としては、松が描かれている点、肌の白い人や黒っぽい人が描かれている点、色遣いに着目し原色が使われている点、南蛮船と周囲の船との描き方に着目し、南蛮船が強調して描かれている点などである。

この時間では、生徒から挙げられた屏風からの情報をこちらが誘導するのではなく、時間をかけて気付くように留意した。最終的に読み解きをまとめる際にも、最初に生徒たちから出た意見を基にしたいという考えからである。しかし、生徒から出る意見を予測して、どのようにまとめるかをより具体的に考えておく必要があった。

< 2 時間目 >

前時の課題のうち、屏風のストーリーをどのように考えたか意見を挙げさせた。これは他の絵画資料でも見られるように、この屏風が異時同図法で描かれていることを理解させることや、細かい気付きを踏まえた上で再度屏風全体の構成を考えさせることを目的とした。その上で、屏風のなかでどこが強調されているか。つまり、製作者の主張がみえてくると考えたのである。よって、次に製作者の主張したい部分について意見を挙げさせた。そこでは南蛮貿易やキリスト教布教に関する意見が多く出ると予想していたので、日本はヨーロッパをどのように考えていたのかという点について意見を挙げさせた。ここでは、南蛮船が来航し、町が活気にあふれているという意見が多く、製作者の主張については南蛮船によって豊かになる様子を強調しているという意見が多かった。そのせいもあってか、日本がヨーロッパをどのように捉えていたか屏風から考えるという点については、日本のヨーロッパに対する憧れ、ヨーロッパは日本に豊かさをもたらす対象であるという指摘があった。こうした意見は南蛮貿易によって何がもたらされたのかを考えさせる良い材料となった。

「南蛮人来朝図屏風」についてのまとめとして、ヨーロッパ人が多くの富をもたらす存在であったことについて触れ、具体的にどのようなものがもたらされたのかを歴博第3展示室のパネルを参考に、ポルトガル語由来の日本語を例に挙げて説明した。

そこで、ヨーロッパ人にとって日本に来るメリットを考えさせることとした。材料として 16 世紀末にイエズス会士が製作したとされる「ティセラ日本図」を使い、読み解きをさせた。ねらいとしては、描かれている都市がキリスト教布教と南蛮貿易の拠点であること

と石見銀山が大きく描かれている点を理解させることである。こちらの読み解きは多くの時間を割くことができないため、石見銀山についてはこちらで説明を加えた。

ポルトガル人は日本の銀を目当てに南蛮貿易を行い、副次的に多くのヨーロッパ文化を日本にもたらしたという理解までならここでまとめて良いのだが、今回は日本からヨーロッパにもたらしたものとして、銀だけではなく南蛮漆器を取り上げた。これについては

2013年企画展「時代を作った技—中世の生産革命—」を参考にした。この企画展示の図録のコピーを資料としてグループごとに配布し、用途、形の特徴などを考えさせ、気付いた点を聞いた。ここでは、宝箱のような形であることからデザインがヨーロッパ由来のものではないかという意見、貝殻の細工が施されているという意見、全体的に派手、豪華であるという意見などが出た。そうした意見を踏まえ、南蛮漆器は材料やデザインなど様々な地域のものを取り入れて製作されたものであることや海城アジアネットワークの説明を加えた。世界史で習った知識との結合と、今まで南蛮貿易と言えればキリスト教や鉄砲などヨーロッパの文化や産物を一方的に享受するという認識が変わったことなど、生徒の良い反応が得られた。

<3時間目>

この時間はまとめとして、通常の授業を行って授業の知識と資料の読み解きから分かることを整理して、授業だけではなく資料の読み解きを通じて立体的に歴史を考えることを理解させることを目的とした。世界史の第一次交易時代から大航海時代にいたるまでの海城ネットワークの形成についてと日本史の南蛮貿易とキリスト教の布教、南蛮文化の話を合わせて行い、最後にワークシートに振り返りを書かせた。本来はグループ内で発表させてグループの代表者にグループごとの意見をまとめて全体で共有し、質疑応答に時間を割いて理解を深めることを考えていた。しかし、まとめる時間を確保するとそこまで及ばなかった。



ティセラ日本図を読み解いている様子



グループごとの意見を出し合っている様子

5. 成果と課題

(1) 成果

- 普段の授業では取り扱う歴史用語の多さから、一方的な知識の伝達や抽象的なイメージの消化になってしまっているが、今回は資料をもとに自分たちで発見したことと授業での扱われ方をつなげることができた。生徒たちはこうした試みについて新鮮であったという感想を多く寄せており、「他の資料も見たい」「実物の資料が見たい」とい

う感想も見られた。

- ・ 屏風の色遣いについて生徒から質問があり、美術の教員にも関わってもらった。日本史と世界史だけではなく美術など他の教科との交流を持つことができた。
- ・ 博物館資料を通常の授業展開において使うことができた。単発の授業ではないため、時代が下って、例えば「鎖国」の単元においても考えさせる材料として授業で話題にすることができる。
- ・ 南蛮漆器の研究成果を授業のなかに取り入れることができた。博物館の研究機能を授業に活用できないかと考えて今回の実践を行った。博物館の資料を通した研究成果を教員との連携によって生徒に分かりやすく伝え、資料に対する考え方を理解させることによって、博物館への関心を高めることを今回の課題としていた。今後もこういった試みを継続させていきたい。

(2) 課題と今後の展望

- ・ 資料の読み取りはもとより、班ごとに意見を出し合う学習に慣れていないので、細かいところまで指示を出さなければならなかった。しかし、大まかな指示で投げかけてしまったので、生徒たちが困惑する場面もあった。
- ・ 扱う資料が複数あったことやワークシートの内容など多くのことを盛り込みすぎて、消化不良の感が否めない。ワークシートは授業後の課題としたが、授業を離れるとその場であったことを忘れてしまうようで、授業内で書く時間を設けるべきであった。
- ・ 資料から日本史と世界史の融合を考えた場合、日本史の南蛮貿易と南蛮文化の単元に世界史をどのように盛り込んでいくかが課題である。
- ・ 16世紀の大交易時代の様子を理解させるのが今回の目的であるが、今後「寛文長崎図屏風」を使って、17世紀のアジア交易が変化した様子と比較した実践を展開することにより、対比して考えさせる。絵画資料の授業展開の継続性を示すことで、絵画資料の読み取りが単発の展開で、興味関心を引きつける材料だけではないことを提示してみたい。

6. わたしの考える歴博活用案

今回の実践を踏まえ、高等学校の通常授業のなかで扱える内容にできるよう検討してみた。以下の点を改善点として挙げる。

- ・ 授業内で扱う資料を「南蛮人来朝図屏風」に限定する。
- ・ 今回のワークシートのなかに、先に時代背景や概要を講義した方が、より内容が深まったのではないかという生徒の意見が複数見られたことを踏まえ、先に内容を説明した後に、資料の読み解きを行う。ただし、予め教えすぎないことに留意したい。
- ・ 通常授業の中では多くの時間を割くことが難しいと考えられるため、内容を精選する。

(1) 事前学習 (1時間)

大航海時代に至る世界史的背景と南蛮貿易、南蛮文化についての説明を行う。

(注1) : 日本学術会議『新しい高校地理・歴史教育の創造- グローバル化に対応した時空間認識の育成 -』 2011年

<資料> ワークシート

日本史Bワークシート No.1
資料を使って大航海時代・南蛮貿易を考えてみよう

1. 屏風をみて、何に注目しましたか?
(松 宣教師、犬、牛、色)

2. 屏風の細部を観てみよう。
[南蛮人の行列・南蛮船の様子・南蛮船の周辺・南蛮寺の様子・南蛮寺周辺の町の様子]
※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。

○自分の気付き
尊敬している 宣教師 → 日本人 屏風の飾り 十景架 桃山文化
つげられたと断言している。
建十景の幕を垂らしている 建物 海を望む建物

○班員の気付き
の 傘をさしている人が王子
中 屏風 建物の土色

3. 制作者がこの屏風の中で最も主張したいことは何だろうか。
日本が南蛮文化の優越を歓迎しているということ

○なぜそう思ったか?
傘をさしているのは 南蛮文化
松

4. この屏風のタイトルを付けたら? 異国人との交流

5. 各級の意見も参考にして、屏風に描かれたストーリーを考えてみよう。
※この屏風の作成目的もふまえて考えてみよう。
南蛮人が 複雑な構図の人物に集まってくる。
L(4)に 向かっていく) 文化の交流
キリスト教の広まり。 貿易
つげられている

日本史Bワークシート No.1
資料を使って大航海時代・南蛮貿易を考えてみよう

1. 屏風をみて、何に注目しましたか?
(松 宣教師、犬、牛、色)

2. 屏風の細部を観てみよう。
[南蛮人の行列・南蛮船の様子・南蛮船の周辺・南蛮寺の様子・南蛮寺周辺の町の様子]
※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。

○自分の気付き
尊敬している 宣教師 → 日本人 屏風の飾り 十景架 桃山文化
つげられたと断言している。
建十景の幕を垂らしている 建物 海を望む建物

○班員の気付き
の 傘をさしている人が王子
中 屏風 建物の土色

3. 制作者がこの屏風の中で最も主張したいことは何だろうか。
日本が南蛮文化の優越を歓迎しているということ

○なぜそう思ったか?
傘をさしているのは 南蛮文化
松

4. この屏風のタイトルを付けたら? 異国人との交流

5. 各級の意見も参考にして、屏風に描かれたストーリーを考えてみよう。
※この屏風の作成目的もふまえて考えてみよう。
南蛮人が 複雑な構図の人物に集まってくる。
L(4)に 向かっていく) 文化の交流
キリスト教の広まり。 貿易
つげられている

6. 日本はヨーロッパをどのように捉えていたのか。仮説を立ててみよう。
(南蛮屏風からの情報をもとに)
新しい宗教、新しい服装、天下の(4) 豆船、財
→ 全てが異なり先進的である。

7. 「ディセウ日本図」をみて、当時のヨーロッパが日本をどのように捉えていたのか考えてみよう。※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。

○自分の気付き
土地の名前を把握している。
今も使われている
一関を取りにくかった。

○班員の気付き
城の大きさで町の大小が 区別されている。

8. 南蛮図について※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。
○自分の気付き
宗教が50%以上ある。
原料が地球
新: 占領地
キリスト教
海: 東洋? → 技術!

○班員の気付き
海: 東洋? → 技術!

9. その他気付いたこと

S2

6. 日本はヨーロッパをどのように捉えていたのか。仮説を立ててみよう。
(南蛮屏風からの情報をもとに)
新しい宗教、新しい服装、天下の(4) 豆船、財
→ 全てが異なり先進的である。

7. 「ディセウ日本図」をみて、当時のヨーロッパが日本をどのように捉えていたのか考えてみよう。※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。

○自分の気付き
土地の名前を把握している。
今も使われている
一関を取りにくかった。

○班員の気付き
城の大きさで町の大小が 区別されている。

8. 南蛮図について※自分の気付きと他の班員の気付きを分けて全部記しておく。
○自分の気付き
宗教が50%以上ある。
原料が地球
新: 占領地
キリスト教
海: 東洋? → 技術!

○班員の気付き
海: 東洋? → 技術!

9. その他気付いたこと

S2